

平安末期の建物にみられる頭貫の手法

建造物研究室

昭和42年度建造物研究室が行つた調査のうちから、平安末期の建物にみられる頭貫の特殊な手法について報告する。

第一は淨瑠璃寺本堂である(第1図)。この本堂は流記によつて嘉承2年(1107)の建立とされる。母屋9間×1間のうち、中尊の安置されている方1間だけは三斗組を組み天井を高く造るが、左右の低天井部分や母屋周囲の底は舟肘木としているから、頭貫は方1間部分にしかみられない。この頭貫のうち、桁行のものは完全な一本であるが、梁行は厚さわずかに3cm程の薄板を2枚立てならば、あたかも一本の頭貫のようにみせかけているだけである。一部破損箇所からうかがうと、桁行頭貫は柱内部に相当はいつているが、梁行の板は柱につきつけになつてゐるにすぎない(第2図)。

第二の資料は鶴林寺太子堂である。この堂は天永3年(1112)の建立とされる(正中年間の墨書)。いわゆる1間4面堂で、組物は母屋・庇とも大斗肘木になつてゐる。したがつて頭貫は母屋・庇双方に回るわけであるが、注目すべきは母屋のものであつて、ここでは頭貫は柱上で交叉し、鼻を出している(第3図)。

従来の見解にしたがえば、平安時代末期までの建築では、頭貫は柱の内部において止められ、しかも重要な構造材であるため省略できないとされてきたのであるから、この二つの手法は異例といふべきである。もつとも二件は同じ方向を指向してはいない。

鶴林寺の場合、あきらかに中世へとつながる手法である(ただし、頭貫の鼻をぶつ切りにしておくことは中國にあるけれども、日本においては存在しないから、これが中世における繩形付

第1図 淨瑠璃寺本堂

第3図 鶴林寺太子堂頭貫

第2図 净瑠璃寺本堂頭貫

頭貫に連続するかどうか分からぬが。これに対し淨瑠璃寺の場合は、見せかけにしているのであるから、あきらかに省略であつて、進歩への方向を示すものではない。しかしながらこれも、内陣柱上の頭貫・組物を内外でまったく別に造る法界寺阿弥陀堂の場合と趣向が同じであるので、これまた藤原末鎌倉初めにおけるひとつの傾向を示すものといわねばならない。

要するにこの二例は、古代末から中世に移行する時期の内的変化を示すものである。それがこれら見え隠れ部分に変化があらわれるのはいつであるのか。両堂の建立年代をもふくめて、再検討が必要になつてくる。

(伊藤延男)

口 繪・木 簡 (第39頁参照)	
(表) 「請繩參拝了」	右為付御馬并夜行馬所請 (上段)
(裏) 「如件 神護景雲三年四月十七日番長 □淨浜」	「少初位下高屋連家麻呂 <small>石京</small> 六考日并千九十九 <small>六年中</small> 」
(表) 「家官戸家人公私奴婢皆當」	「凡官奴婢年六十六以上乃□」
(表) 「津島連生石」	春日惊人生 <small>母力</small> □宇太郡
(表) 「召急山部宿祢東人平群郡 忍海連宮立忍海郡 大豆造今志庄脅郡」	三宅連足島山邊郡
(裏) 「刑部造見人 小長谷連赤麻呂 右九 榛人大田充食馬」	和銅六年五月十日使葦屋
(下段) 「薄鮫川七斤五編」	「蒸鮑壺籠 <small>と野井</small> 」
(表) 「越中國利波郡川上里鮒雜」	「伊知比古」
(裏) 「腊一斗五升和銅三年正月 四日」	「押年魚上」